平成２８年度　各種調査結果等を活用した学力保障の取組事例

事務所名	中部教育事務所	学校名	遠野市立遠野中学校	TEL	0198-62-2814

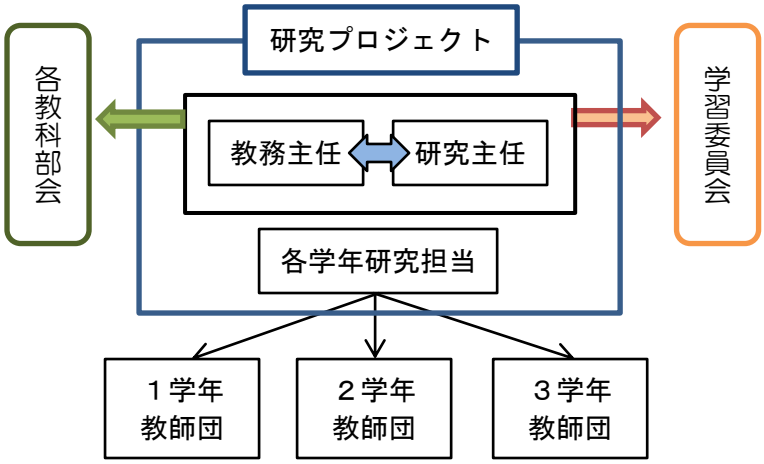
組織をもとにした多角的な授業改善と家庭学習の定着と学習意欲を喚起するための取組

【今年度の目標】
①各教科における正答率５０％未満の小問の減少。
②中２数学における「数と式」領域の正答率を県比１００に近づける。
③中２英語における英作文問題の正答率を５０％に近づけ、無答率を１０％以内にする。
④児童生徒質問紙の「授業がよく分かる」の積極的肯定回答を各教科とも４０％以上にする。
⑤家庭学習の実質的時間の確保をねらった学習課題を設定する。

【組織的な対応を図る上で工夫した点】
（１）研究プロジェクトでの研究推進
　研究主任、教務主任、各学年の研究担当による研究方法の企画、推進

（２）教務部内組織による学力保障
　①　学期ごとの取組目標と取組計画の提示
　②　中学校区の取組「課題意識の継続」「達成状況の把握」の徹底

（３）指導部（学習委員会）との連携
　①学習コンクールの実施
　②家庭学習ノートづくりの取組



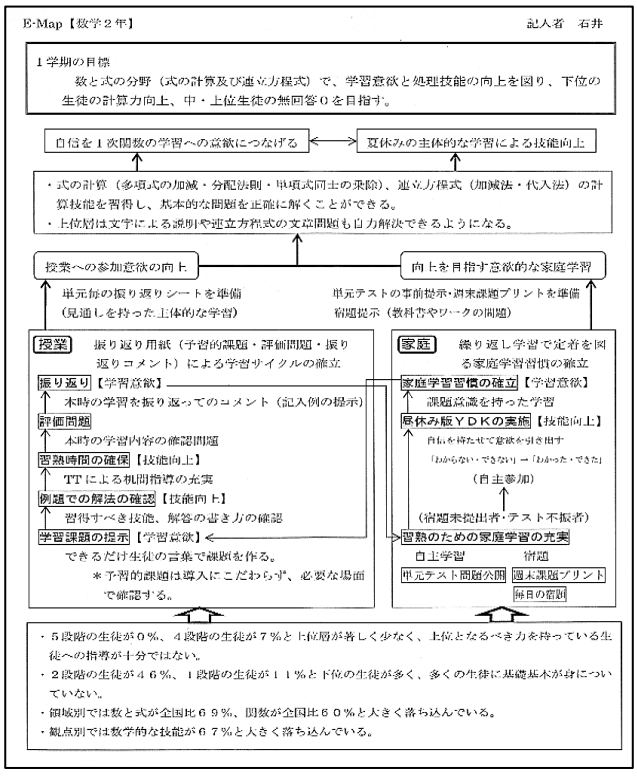
本校には研究部はなく、教務部における組織的な推進を図ることが要となる。そこで、これまでの組織をもとに基礎・基本の定着と、家庭学習の充実を目指した学びの方法を身につけさせることを目的としたプロジェクトを立ち上げた。やればできるという意欲を引き出すために、各教科部会や学習委員会を中心に指導部とも連携を行った。

【具体的な取組】
（１）授業力向上に向けた取組
　遠野市では中学校区ごとに視点を設けて取組を行っており、遠野中学校区では下記の視点をもとに授業を展開している。

遠野中学校区の取組　２つの視点
１　課題意識の継続
　生徒の意見を取り入れた課題を設定して、授業中その意識が継続するよう工夫する。
２　達成状況の把握
　授業にふり返りの時間を設定し、生徒自身が課題を達成できたかどうかをまとめる。

　本校においては、次の点を重点に置いて、授業改善を図った。
①　校内研での２つの視点に基づく授業実践交流
②　１人１授業での研究授業の実践
③　定期的な教科部会の実施（月１～２回）
④　ゴールを見通したE-map の作成
⑤　ＮＲＴ分析結果を活かしたテスト問題作成

【E-map】　教科ごとに調査結果を分析し、課題を明らかにして目標を達成するためにどのように授業を行うか、その構想を図式化したもの。（下図参照）



（２）家庭学習の定着に向けた取組

家庭学習の定着のためには、一定時間をかけて取り組む内容を提示することが必要と考えた。そこで家庭学習ノートと教科の宿題を以下のように指導した。

① 家庭学習ノートの指導

・４月に全体→学年→教科の順に３回ガイダンスを行う。
・家庭学習、教科連絡、日記を一冊にまとめる。
・ノートを２分割して空欄を出さず、内容を充実させる。
・２ページの家庭学習で１時間の学習時間を目標に。
・学習委員会を中心とした提出取組を行う。

毎日２ページのノートを提出することとし、１ページを２分割して内容を増やし、５教科まんべんなく学習できるようレイアウトを工夫させた。（右図参照）

② 毎時間の宿題提示

・その日に授業があった教科から提示する。
・１教科１５分程度、計１時間かかる内容にする。
・授業の復習や、予習的課題など内容を工夫する。
・宿題を授業で生かし連動を図る。

（３）学習意欲の喚起に向けた取組

教え合い学習を通じて達成感を持たせ、学習意欲喚起につなげるために、以下の取組を行った。

ア 学習コンクールの実施

生徒会学習委員会が実施。１年生の内容で全学年共通問題を作成し、１週目→教え合い学習、２週目→プレテスト、３週目→本テストの順で取り組む。
学年を越えて競い合うことで、生徒の学習に対する苦手意識をなくすことを目的とする。
同時に、学級ごとに独自の取組を行うことで、学級づくりの一環として生徒指導面に役立てることも目的とした。

イ 学習会「ＹＤＫ」（よくできる子）の実施

長期休業時に、数学を中心に学習が苦手な生徒を選抜し、全校体制で教師がつき、個別指導を行う。
普段授業では発言できない生徒が、臆せず質問できることと、基礎基本の定着を目的とした。（右写真）

（４）弱点分野克服に向けた取組

ＮＲＴ検査の分析をもとに、夏季休業中に教科部会を開いた。弱点分野を明らかにし、取組計画を立て、２学期の授業の中で実践した。以下は２年生各教科の実践内容である。

国語･･･書き方のモデルを示した、「書くこと」の指導を授業で取り入れる。
社会･･･生徒自身がまとめたり発表したりする時間の確保。その日に行う宿題の具体的な指示。
数学･･･単元が変わることから、見方、考え方の学習を重点にグループ学習を行う。
理科･･･毎時間、既習事項に重点をおき、教え合い等を行い、最後にチェックテストを行う。
英語･･･ＣＡＮ－ＤＯリストをもとにした作文指導。

（５）　「授業がよく分かる」に焦点を絞った各教科取組

（１）～（４）の校内で統一した取組に加え、各教科では「授業がよく分かる」に焦点を絞り、さらに以下のように実践を行った。

○国語	・毎時の授業で課題設定時に何を学習するのかを意識させる。 ・授業の初めに行う漢字練習、宿題として行うワークの問題を定期テスト問題と連動させ学習意欲の向上を図る。
○社会	・学習課題の設定～まとめ、振り返りを５０分以内に収めるようにする。 ・ペアやグループでの学習の中で、友人から学ぶ場を設ける。
○数学	・振り返りカードを用いて見通しを持たせるとともに毎時間の振り返りを行い、学習意欲の向上を図る。 ・進度に合わせた宿題の提示をする。苦手な生徒に向けて、昼休みに自主ＹＤＫを行う。
○理科	・学習課題の設定～まとめの流れを徹底し、授業が１時間で完結するよう意識して指導する。 ・毎時間の復習とそれにつなげるための宿題の提示をする。
○英語	・学習意欲の向上をねらい、授業の最初で「聞く・話す」活動を意図的に組み入れる。

（６）今年度の県学調の結果を受けての事後取組

２学年における本調査結果を分析し、喫緊に定着させる事項を洗い出し、以下の取組を計画した。

また、１学年、３学年でも以下のような取組を行い、学力保障に向けた全校取組として実施した。

○２学年

・県学調結果を提示し、生徒に自分たちがどの分野が苦手にしているかを伝える。
【生徒に実態を把握させる】

・各教科で２週間、苦手分野克服に向けての取組を５～１０分、授業時間内で行う。
【学習の見通しを持たせる】

・家庭学習ノートにまとめる問題を一覧にして配布し、５日間学力向上キャンペーンを行う。
【学校・教師の熱意、真剣さを伝える】

・最後にチェックテスト（過去の学調問題）を行い、２週間でどれだけ伸びたかを評価する。
【結果と評価で達成感を実感させる】

○１学年

・入学後のこれまでの学習で定着状況が悪く、今後の学習で必要とされる領域・分野を復習

○３学年

・実力テストや入試を考慮し、教員が定着させたいととらえている領域・分野の問題を復習

※両学年のチェックテストは過去の全国学調、新入生学調、ＮＲＴを参考に行った。

次の表は、２学年の各教科で行ったチェックテストの結果である。

	問　　題	過去の本校正答率との比較
国語	・文章の展開を確かめながら要旨をとらえる（Ｈ２８県学調）	＋１１．３％
	・漢字「大規模」を正しく書く（Ｈ２８県学調）	＋１７．２％
	・漢字「肺活量」を正しく書く（Ｈ２７県学調）	－０．５％
社会	・地図を読み取り、都市間の距離を比較する（Ｈ２７県学調）	＋１３．１％
	・計算によって時差を求める（Ｈ２７県学調）	＋４３．４％
	・鎌倉時代の政治の特色を学ぶ（Ｈ２８県学調類題）	＋１９．６％
	・鎖国下の対外関係について正しいものを選ぶ（Ｈ２８県学調類題）	＋１２．３％
数学	・正負の数の計算（Ｈ２７県学調）	＋３５．７％
	・同類項をまとめる計算（Ｈ２７県学調）	＋２４．２％
	・累乗の計算（Ｈ２８県学調類題）	＋１９．９％
	・連立方程式を解く（Ｈ２５県学調）	＋１．４％

理科	・ルーペの正しい使い方を選ぶ（Ｈ２５県学調）	＋３５．１％
	・質量パーセント濃度の計算式を答える（Ｈ２７県学調）	＋３４．６％
	・水の分解の化学反応式を答える（Ｈ２５県学調）	＋２．８％
英語	・英語を聞いて、１部の空欄に語を書き入れる　（name） （Ｈ２７県学調）　（beautiful）	＋２４．１％ ＋２２．３％
	・並べ替えて、正しい英文にする（Ｈ２７県学調）	＋１８．５％

ほとんどの項目で過去の本校正答率を上回った。キャンペーンとして学年全体で取り組んだことにより、教職員、生徒ともに学力向上に向けて一体となり取り組むことができた。

【取組の成果と今後に向けて】

１　遠野市は、中学校区ごとに統一した取組を行っている。過去４年間の小中連携での取組が、学習の基盤を支えていることを改めて感じた。今回の実践でも、中学校区の視点に基づいた授業を徹底して行っている教科の方がよい結果を示しているのは明らかである。

２　家庭学習取組や、学習コンクール等の生徒に理解しやすい取組では、学習への意欲を高めることができた。実践においては、経過や結果を「見える化」するなど、生徒の視覚に訴える提示方法を工夫する必要があるといえる。

３　家庭学習ノートの指導や毎日の宿題提示に継続的に取り組むことにより、学習状況を向上させることができた。

今年度の県学調質問紙調査では、以下のような結果となった。

〇学校の授業以外で、１日にどれくらいの時間勉強をしますか。

	H27 県学調本校	H28 県学調本校
１　３時間以上	１％	３％
２　２時間以上、３時間より少ない	１２％	１２％
３　１時間以上、２時間より少ない	４７％	５４％
４　３０分以上、１時間より少ない	２８％	１８％
５　３０分より少ない	１０％	１１％
６　全くしない	２％	２％

４　県学調に向けて、「どのような授業を行っていけばよいのか」を再検討するために、各教科部会で取り組んだ“E-map”は大変有効であった。「目指す姿に調査結果の分析をどう結び付けていくのか」について、図に書き入れながらより具体的な構想が整理され、その後の教師側の取組に大きく反映された。今後も、各種調査の分析の際に取り入れて授業改善に繋げて行きたい。

５　全教師が一体となった実践は、一定の効果があることが確認された。取組期間に関わらず、教師側の実践を徹底することが生徒の意識を変える近道だといえる。今後も実践内容の共通化を図り、チェック機能も強化しながら徹底できるような実践をしていきたい。

６　今回の取組で効果を上げた実践は、教師間の連携がしっかりとできたものだった。分析結果をもとにして一人一人が役割を持ち、機能することで生徒への一体感ある取組につながることが共通認識できた。